

行ってみたい・住んでみたい・語りたいまち 自然と歴史と市民力で創るわがまちの未来図

悠久の歴史に培われた地域財産と 市民自治の精神

大和朝廷による統一国家体制構築の基盤が芽生えた4世紀(古墳時代後期)から、8世紀前半までの飛鳥・奈良時代にかけて、歴代天皇が都を建設し、宮(皇居)を造営した奈良盆地(大和平野)の西南端に位置する御所市は、昭和33(1958)年3月、旧南葛城郡御所町・同葛村・同葛上村・同大正村の1町3村による合併で市制施行(面積60・58㎢)。本年3月で市制65周年の節目を迎えた(本年6月末現在の人口は2万3875人)。

地域の西部には、古来、神秘の山と敬われてきた金剛山地の主峰・金剛山(標高1125m)や葛城山(同959・2m)が連なる。金剛山の東側から五條市との市境を成す市域南側のエリアは、竜門岳(標高約

904m、奈良県宇陀市・同吉野郡吉野町)へと至る竜門山地が続いている。

金剛山地の北部に位置し、二つの山頂を持つ二上山(標高約517mの雄岳と標高約474mの雌岳、奈良県葛城市・大阪府南河内郡太子町)は、現在の金剛山・葛城山と共に「葛城山」と総称されていた時代もある。

また、金剛山・葛城山が所在する御所市および、二上山が所在する葛城市と共に、葛城山周辺地域として、大和国創生にまつわる歴史や神話の舞台になった大和高田市、香芝市、北葛城郡広陵町を合わせた4市1町は、現在、「葛城地域観光協議会」を共同で組織し、「かつらぎの観光振興」を軸とする広域連携関係を結んでいる。

大和国創生にまつわる「神話」と「古代史」の多彩な様相を描き、現代においても重要史料の一つに位置付けられる、あの『記紀』(奈良時代編さんの『古事記』『日本書紀』)や、日本最古の歌集『万葉集』にも、金剛・葛城・

ひがしがわ ゆたか
東川 裕
御所市長

二上とその周辺にまつわる地名がしばしば登場する。現在の御所市周辺エリアは、記紀・万葉の時代から、日本人の心の琴線に触れる高い精神性を、常に宿してきたのだ。

同時に、竜門山地に発する大和川水系の曾我川や、金剛山から湧出して曾我川に注ぐ葛城川などは、御所市エリアを縦断し、奈良盆地を潤す貴重な水源の役割を果たした。さらに、物資を運ぶ大動脈の役割をも





葛城山上を真っ赤に染め上げるツツジは「見事」の一語に尽きる(葛城高原自然つつじ園)



金剛・葛城山麓の秋を彩る黄金色の穂波。まさに日本人の心の原風景といえる



「御所まち霜月祭」は古いまち並みの中で、歴史に触れながら食や交流などが楽しめる御所市の代表的な催し

葛城氏や、6世紀から8世紀にかけて、朝廷政治に影響力を持った巨勢氏などにまつわる史跡が、葛城山や金剛山を中心に、葛城の道、巨勢の道、葛城氏や巨勢氏のものとしてされる古墳群や古寺社など、数多くあります。

その分、古代から近世までに至る文化財も豊富で、5件の重要文化財を始めとする国指定文化財は16件、奈良県指定文化財は12件、御所市指定文化財は7件、国登録文化財(※建造物)も8件あります。

また、葛城氏や巨勢氏は、御所市と

担うなど、まほろば(理想郷)としての奈良盆地の形成において、御所市とその周辺エリアは常に、物心両面からの恵みをもたらす、重要な位置付けにあったともいえる。

県都・奈良市から25km圏、大阪の都心部からも30km圏の至近に位置する御所市は、JR西日本和歌山線の4駅、近畿日本鉄道御所線・吉野線の3駅、そして葛城山ロープウェイの2駅が市内にある。

さらに、京都・奈良・和歌山を結ぶ京奈和自動車道(御所IC、御所南IC)および国道24号、

和歌山県南部・新宮市から紀伊半島を縦断し、大阪府枚方市と結ぶ国道168号、関西国際空港に直結する国道309号が市内を通るなど、幹線道路網も完備している。

そのため、御所市は京都市や大阪市の中心部まで約1時間の通勤圏内に位置。ベッドタウンとしての評価にも非常に高いものがある。

「大阪府と奈良県のちょうど境目に位置する御所市の辺りは、古代の人々の感覚ではより以上に交通至便な地域であったはずで、時には外敵から奈良盆地の南西方面を守ったり、重要な砦としての位置付けにもあったのではないかと、私は考えています」

そう語るのは、東川裕御所市長だ。

「御所市内には、5世紀を中心に、時の天皇家の外戚として権勢をほしきままにした葛城氏や、6世紀から8世紀にかけて、朝廷政治に影響力を持った巨勢氏などにまつわる史跡が、葛城山や金剛山を中心に、葛城の道、巨勢の道、葛城氏や巨勢氏のものとしてされる古墳群や古寺社など、数多くあります。



その周辺エリアを軸とする葛城地域を本拠に、都を護り、天皇政治を補佐することなどにより、自らの領地では一種独立国家的な強み(自治能力)を発揮していたのではないかと。そんなふうにも考えております」(東川市長)

生まれも育ちも御所市という東川市長は、昭和60(1985)年に大学を卒業後、明治時代から続く家業の酒販店を、4代目当主として継承した。そして、御所市商工会理事や葛城青年会議所理事長などを歴任し、現在も続



甘柿のルーツとされる御所柿(ごしょがき)は江戸期・大和地方屈指の名産品だった



鴨都波神社のススキ提灯献灯行事は夏祭り（毎年7月16日）・秋祭り（毎年スポーツの日の前々日）のハイライトだ



全国の加茂(鴨)社の根源とされる鴨都波神社(下鴨社)

を舞台に繰り広げられる市民協働の催しだ（毎年11月第2日曜日開催）。文化財指定などを受けている町家の特別公開、旧家の所蔵する歴史的資料の展示（町家ミュージアム）のほか、地元住民の趣味の作品展示（町かどギャラリー）、町家カフェ・町家茶屋、緑日、演芸ライブなどが盛りだくさんに用意される。コロナ禍のため、令和2年、3年と中止の憂き目に遭ったものの、令和4年は3年ぶりの開催となり、活況を呈した。

「私にとっては、御所まちの酒屋の息子に生まれ、家業を引き継ぐのと同時に、霜月祭の創設や運営に携わり、NPO活動などを通じ数々の地域イベントや地域活性化活動などにもかかわったことで、地域の歴史やまちづくりについての多様な考え方がおのずと蓄積されました。さらに、さまざまな経緯があり、市長選挙に出ることにもつながったわけです。

く「御所まち霜月祭（そうげつさい）」の創設や運営を中心に担うなど、市民協働のまちづくりのリーダーとしても活動。NPO法人「こせまちネットワーク・創」副理事長などを経て、平成20（2008）年6月に実施された市長選挙に出馬し、初当選。本年6月から4期15年目に入っている。

行政と市民の相互理解をバネに進む魅力的なまちづくり

御所市を代表する催し「御所まち霜月祭」は、現代の御所市の中心市街地で、江戸時代初期に形成された陣屋町「御所まち」全域

しかし、それらのことを全て含めて、御所市全域で代々伝わってきた《地域力》の後押しがあったからこそその結果なのだ、今改めて思います。

といいますが、葛城氏や巨勢氏など、古代からこの地域に培われてきた自主独立の気概は、江戸時代に入ってさらに開花します。江戸時代の御所まちは幕府の直轄地でしたが、地域の商人たちが中心になり、

町人自治に近いまちづくりを行いました。

その市民自治・住民自治の精神は、古代の統治者である葛城氏や巨勢氏以来、代々受け継がれてきた自主独立の精神を尊ぶDNAであり、現代の御所市にも脈々と息づいている。そのことを私自身、市長に就任して以来、つくづく実感してきたのです」（東川市長）

古来の伝統である住民自治のDNAが、現代の御所市の地域全体に受け継がれていることを、東川市長が改めて実感したとする最初の体験は、就任直後に開始した、市民サービスの削減を含む厳しい行財政改革に臨んだ際のことだった。

「私が就任した平成20年6月当時の御所市は、同年度決算（平成21／2009年9月確



5世紀前葉に築造された古墳では奈良県最大級の宮山古墳（別称:室大墓、一部が国指定史跡）を桜田池公園越しに望む

御所市

(奈良県)

市 政 ル ポ

定)において、早期健全化団体になることが
確実視されるほど、財政状態が悪化してい
ました。そこで、就任3カ月後の平成20年
9月に『財政非常事態宣言』を発令し、『御所
市再生アクションプラン』を平成21年3月に
策定。平成21年度から25(2013)年度ま
で、5年間にわたる財政運営の方針を示しま
した。

それ以後、財政健全化を何よりも重要な
当面の施策として取り組むため、市民体育
祭や敬老会など、市民生活に深く密着した
イベント関係への補助金も、カットせざるを
得なくなりました。ついこの間までは自分
自身が地域の祭りやイベントを推進する市
民の側にいたこともあり、これについては本
当に、市民の皆さんには申し訳ない気持ち
でいっぱいでした(東川市長)

ところが、財政非常事態宣言を行い、再
生アクションプランを明示し、市政の窮
状を包み隠さず市民に知らせた結果、その
ことを理解した市民有志が中心になり、補
助金がなくなった分を自分たちで集めるな
どして、市民体育祭や敬老会も無事、開催
されたのだ。

ここで重要なのは、市民が「予算がないな
ら、やめとこか、とはならなかった」(東川
市長)ことだろう。市民や地域の事業者と行
政は「地元(地域)」を構成する両輪。両者が
混然一体となっていくのが「地域振興」なの
だという、相互理解を前提とする「あ・うん

の呼吸(DNAの存在)」が、このエピソード
からはうかがえる。

「補助金は出せませんでした。でも、市役
所は人手を出したりして、お金のからなら
ないバックアップを懸命に行いました(笑)。そ
の結果、それまでは市民主体のイベントに
市役所がお金を出さずだけで終わりがちだっ
た両者の関係性が、本物の協働の関係性へ
と発展し、催事も従来とは違う、手作り感
満載の、面白いものになりました。

地域イベントなどにおける、行政と市民・
事業者などとのそうした程よい距離感の関
係性は、現在も続いています(東川市長)

東川市長はこのときの感動を思い出すた
び、古事記にも記されている仁徳天皇の有
名な説話「民のか
まど」を想起す
るという。

『民のかまど』
の説話は、若き
日の仁徳天皇、
大雀命おほすけのみことが高台
から奈良盆地に
暮らす民衆の暮
らしぶりを見た
ら、人家のかま
どから煙が上が
っていない。これ
は民が貧しい生活
をしている証拠だと

気付かれた大雀命は、そこから3年間租税を
免除し、ご自身も質素儉約に努め、宮殿の屋
根の修復も控えました。

そうこうするうちにまた豊作が訪れ、暮ら
しにゆとりの出た民たちは、自ら徴税の再開
を申し出るとともに、宮殿の屋根の修復をも
行なったという説話です。

古代天皇と民との関係を、現代の地方自
治体と市民との関係になぞらえるのは、適
切でないかもしれませんが。しかし、人口減
少が不可避の潮流になっている現代の地方
都市において、にぎわいを創出し、雇用の
場を創設し、老若男女、全ての世代の人々
に、この地で暮らし続けていきたいと思っ
てもらえるようなまちづくりをするのに最も



平成20年に復元された江戸時代の高札場(御所まち)



江戸時代後期の町家「中井家住宅」は国の登録有形文化財(御所まち)



御所市は部落解放運動を推進した全国水平社（大正11年創立）の発祥地、人権のふるさととしても知られている（水平社博物館）

必要な要素は何か。それは、行政と市民との協働関係や、共通認識に基づく相互理解ではないでしょうか。そういう意味合いにおいて、仁徳天皇と民たちが相互理解で深く心で結び付いた説話『民のかまど』は、心に突き刺さるのです」（東川市長）

しかも、仁徳天皇の皇后（石之日売命）は、当時の御所市エリアを支配していた葛城氏の出身。市内には石之日売命の父、葛城曾都毘古の墓ともされる宮山古墳（一部国指定史跡）が実在する。

「だからこそ、行政が苦しいときには自分たち市民が何とかするという、御所市民（有志）の気質は、『民のかまど』以来のDNAではないかと関連付けたくありません（笑）。また、そうした市民力こそは、御所市の重要な地域財産の一つ、御所市流の持続可能なまちづくりを考える上での基盤なのだと考えています」（東川市長）

東川市長が就任直後から進めた果敢な行財政改革は、市民の深い理解や議会の後押しもあり、予定より2年も早い、開始3年度の平成23（2011）年度に一般会計の収支が早くも黒字に転化する。これは41年ぶ

りの快挙だった。以後、本年5月末の出納閉鎖で判明した令和4（2022）年度の一般会計（実質収支）でも約8億3000万円の黒字となり、12年連続で黒字計上を記録している。

銭湯を中心とする分散型ホテルがけん引する新たな息吹

「とはいえ、御所市の財政上のアキレス腱になっていく、依存財源に頼る財政構造は依然、解消されていません。自主財源を積み上げようにも法人税などの市税収入が少なく、なかなか思うようにはいかないのも事実です。しかし、例えば長年の懸案である京奈和自動車道御所IC周辺エリアへの《産業集積地整備事業》のほか、《近鉄御所駅およびJR御所駅周辺整備》と一体的に進める予定の《新市庁舎建設》などの大型事業に関する諸経費も、本年度当初予算に少しずつ組み込める状況までには、回復しつつあります。みんなが安心して暮らし続けられる安全なまちづくりの目玉施設として、先行的に進めていた《仮称・防災市民センター》の建設は、令和6年1月の供用開始が確実な状況となっています」（東川市長）

災害時には避難所として、平時には子育て関連の交流施設として機能する防災市民センターは、配備する公用車を電気自動車（そのまま移動用大容量蓄電池としても活用



分散型ホテル「GOSE SENTO HOTEL」の中核を担う銭湯「御所宝湯」の入り口（御所まち）

可能）にするなど、先進的な防災施設として注目を集めている。

さて、令和4年秋に3年ぶりの復活が成った霜月祭を契機に、ウィズコロナ時代の御所市における観光振興への機運は地域全体にみなぎり始めている。とりわけ、御所市の多様な魅力の発信拠点、周辺エリアも含めた「葛城地域」の観光振興の拠点でもある中心市街地・御所まちを少し歩けば、新たな「活気の芽」が随所に芽生え始めていることが、改めて実感される。

葛城川の水流を活用した環濠集落・御所まちは、近鉄御所駅ならびにJR御所駅（両駅は数十m離れている）から徒歩10分ほどの市域北部、葛城川を挟んだ両岸（寺内町中心の東御所・商業都市の西御所）に形成され、江戸初期から明治・大正・昭和初期に建築

御所市

(奈良県)

市 政 ル ポ



旧自転車店の古民家が宿に!! 御所宝湯とともに分散型ホテル「GOSE SENTO HOTEL」を構成する「宿チャリンコ」



大正7年創業のモリソン万年筆本店がカフェ&バーに!! 「GOSE SENTO HOTEL」を構成する宿泊施設「RITA 御所まち」も併設

された建物群による、風情あるまち並みが整然と展開している。

東川市長も参画していたNPO法人「ごせまちネットワーク・創」を中心に、地域住民によるまち並みの保存・活用への取り組みは平成15(2003)年ごろから始まった。御所市では、このまち並みを無理なく維持・保存するため、伝統的建造物群保存地区(伝建地区)制度の導入を企図。平成30(2018)年度から令和2(2020)年度まで、奈良女子大学との協働で予備調査も行っている。

伝建地区制度導入事業の主要目的は、まち並みの維持・保存による歴史的価値の保全・向上にあるが、それだけではない。人口減少と共に増えつつある、空き家

の再活用事業との組み合わせによる地域活性化、観光振興による交流人口の増大化、雇用の場の創設、伝統と現代的センスが同居する魅力あるまち並みの新たな形成および、にぎわいづくりなど、多様な取り組みが含まれている。

中でも令和4年10月、「御所まち全体で観光客をもてなす」というコンセプトの下、全国的にも珍しい「銭湯を中心とする分散型ホテル/GOSE SENTO HOTEL」が開業したことにより、従来とは異質の活況がもたらされようとしている。

「私が市長に就任した平成20年に閉業した、御所市に建っている最後の銭湯・宝湯を、まず《株式会社御所まちづくり》(「GOSE SENTO HOTEL」プロジェクト)の企画・開発・運営事業者として令和3/2021年設立)が買い取りました。

そして、再生した銭湯を中心に、御所まちに立地する古民家3軒をそれぞれレストラン(洋食屋ケムリ)、宿泊施設(宿チャリンコ、RITA御所まち)などにリニューアル。それらを分散配置することで《泊・食・湯》を御所まちの中心部で立体的に楽しんでもただこうというのが《GOSE SENTO HOTEL》開業の狙いです(東川市長)

《御所市第6次総合計画》の標語を借りれば、これは「行きたい、住みたい、語りたいまちづくり」を発信するのにも最適な、御所市ならではのまちづくりの典型的事例だ

う。この他にも民間事業者(飲食・宿泊業など)の進出が促されるなど、同プロジェクトの波及効果も既に出始めている。

また、例えば株式会社御所まちづくりに出資している油長酒造は、享保4(1719)年創業の老舗蔵元だ。江戸初期に形成された御所まちを代表する企業として、現在も地域文化の発展に尽力している。

こうした地域の底力とそこから育まれる市民力との合わせ技から醸し出されるのが、例えば前出の「予算がないならやめとこか」とはならない市民たち」による、地域(わがまち)振興への思いと行動なのだろう。

繰り返しになるが、それこそまさに「御所市最大の地域資源」(東川市長)なのだ。

(取材・文：遠藤隆／取材日：令和5年5月31日)



葛城川に注ぐ支流・柳田川は地域の人々の憩いの場。桜の名所として観光客にも人気